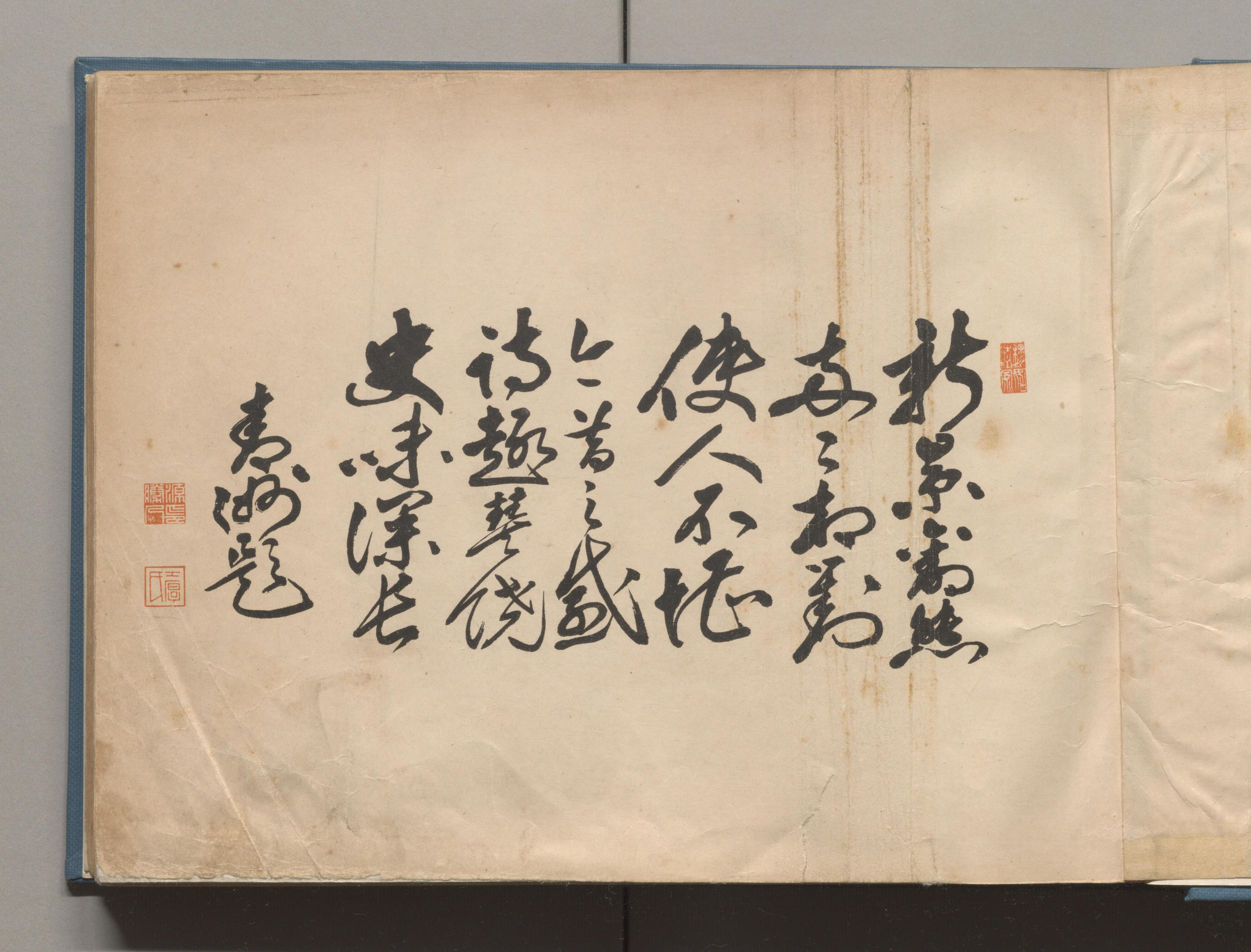
412-37
1200501470589
412
37
T

8H-6

412-37

東漢會要

大正
7.4.17
内交



新景萬然
每〻相對
使人不恨
〻者〻盛
詩趣琴說
史味深長
青岡題

東海道今昔對照地圖

廣重畫五拾三次
現狀寫眞對照 東海道

目次

題字　前遞信大臣　箕浦勝人君書
東海道今昔對照地圖　銅版影刻色刷
豐國畫廣重肖像　オフセット刷……一
日本橋（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　オフセット刷……二
品川（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　コロタイプ刷……三
川崎（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　オフセット刷……四
神奈川（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　コロタイプ刷……五
程ヶ谷（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　オフセット刷……六
戸塚（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　コロタイプ刷……七
藤澤（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　オフセット刷……八
平塚（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　コロタイプ刷……九
大磯（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　オフセット刷……一〇
小田原（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　コロタイプ刷……一一
箱根（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　オフセット刷……一二
三島（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　コロタイプ刷……一三
沼津（廣重畫）同……同（寫眞）同……同　オフセット刷……一四

同原　同吉　同蒲　同由　同興　同江　同靜府　鞠丸　岡藤　同島　同金　同日　同掛　同袋

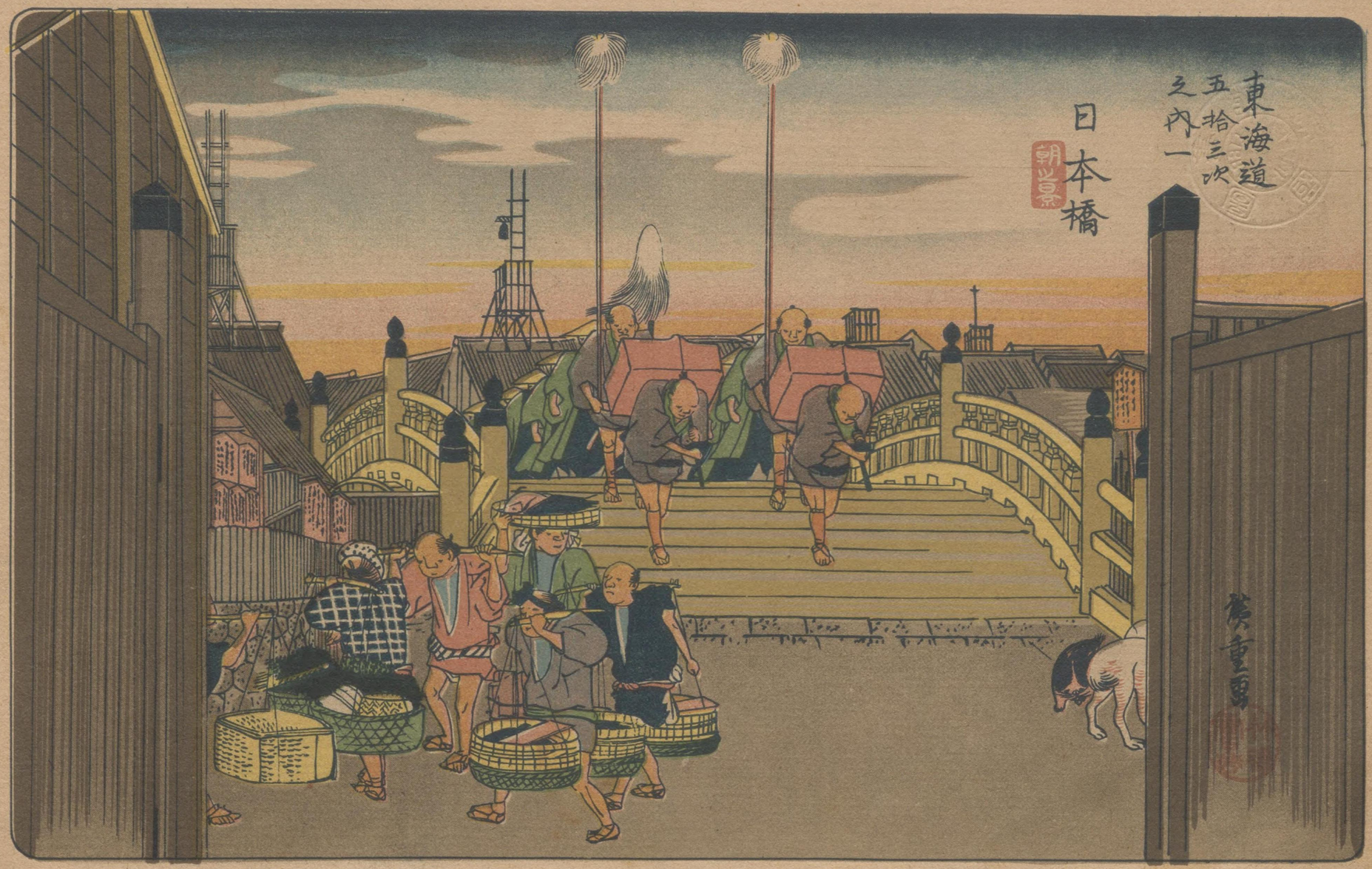
（寫眞）コロタイプ刷……二七
同　（寫眞）同……二八
（廣重畫）オフセット刷……二九
同……三〇
（寫眞）コロタイプ刷……三一
同……三二
（廣重畫）オフセット刷……三三
同……三四
（寫眞）コロタイプ刷……三五
同……三六
（廣重畫）オフセット刷……三七
同……三八
（寫眞）コロタイプ刷……三九
同……四〇
（廣重畫）オフセット刷……四一
同……四二
（寫眞）コロタイプ刷……四三
同……四四
（廣重畫）オフセット刷……四五
同……四六
（寫眞）コロタイプ刷……四七
同……四八
（廣重畫）オフセット刷……四九
同……五〇
（寫眞）コロタイプ刷……五一
同……五二
（廣重畫）オフセット刷……五三
同……五四
（寫眞）コロタイプ刷……五五
同……五六

原　原　井　津　尻　中岡（府中）　子部（鞠子）　枝　田　谷　坂　川　井

同見（廣重畫）オフセット刷……五七
同同（寫眞）同……五八
濱松（寫眞）コロタイプ刷……五九
同坂（寫眞）同……六〇
舞坂（廣重畫）オフセット刷……六一
同同（寫眞）同……六二
新居（荒井）（廣重畫）コロタイプ刷……六三
荒井（寫眞）同……六四
白須賀（廣重畫）オフセット刷……六五
二川（寫眞）同……六六
同同（廣重畫）コロタイプ刷……六七
吉田（廣重畫）同……六八
豐橋（吉田）（寫眞）オフセット刷……六九
御油（寫眞）コロタイプ刷……七〇
赤坂（廣重畫）同……七一
同同（寫眞）同……七二
藤川（寫眞）オフセット刷……七三
同同（廣重畫）コロタイプ刷……七四
岡崎（廣重畫）同……七五
同同（寫眞）同……七六
知立（池鯉鮒）（寫眞）オフセット刷……七七
同鯉鮒（廣重畫）同……七八
池鯉鮒（廣重畫）コロタイプ刷……七九
鳴海（廣重畫）同……八〇
同同（寫眞）同……八一
熱田（宮）（寫眞）オフセット刷……八二
同同（廣重畫）コロタイプ刷……八三
宮同（寫眞）同……八四
桑名（廣重畫）オフセット刷……八五
同同（廣重畫）同……八六

同四日市（寫眞）コロタイプ刷……八七
同石薬師（廣重畫）同……八八
同庄野（寫眞）同……八八
同龜山（廣重畫）オフセット刷……八九
同關（廣重畫）同……九〇
同坂下（寫眞）コロタイプ刷……九一
同土山（寫眞）同……九一
同水口（廣重畫）オフセット刷……九三
同石部（廣重畫）同……九四
同草津（寫眞）コロタイプ刷……九五
同大津（廣重畫）オフセット刷……九七
京都（寫眞）同……九
京都（寫眞）コロタイプ刷……九八
廣重（廣重畫）同……九九
墓（寫眞）コロタイプ刷……一〇〇
同（廣重畫）オフセット刷……一〇一
同（廣重畫）同……一〇二
同（寫眞）同……一〇三
同（寫眞）コロタイプ刷……一〇四
同（廣重畫）オフセット刷……一〇五
同（廣重畫）同……一〇六
同（寫眞）コロタイプ刷……一〇七
同（寫眞）同……一〇八
同（廣重畫）オフセット刷……一〇九
同（廣重畫）同……一一〇
同（寫眞）コロタイプ刷……一一一
同（寫眞）同……一一二

附錄 東海道中膝栗毛……自第一頁至第四〇頁


東海道
五拾三次
之内一
日本橋
朝嵩
廣重画

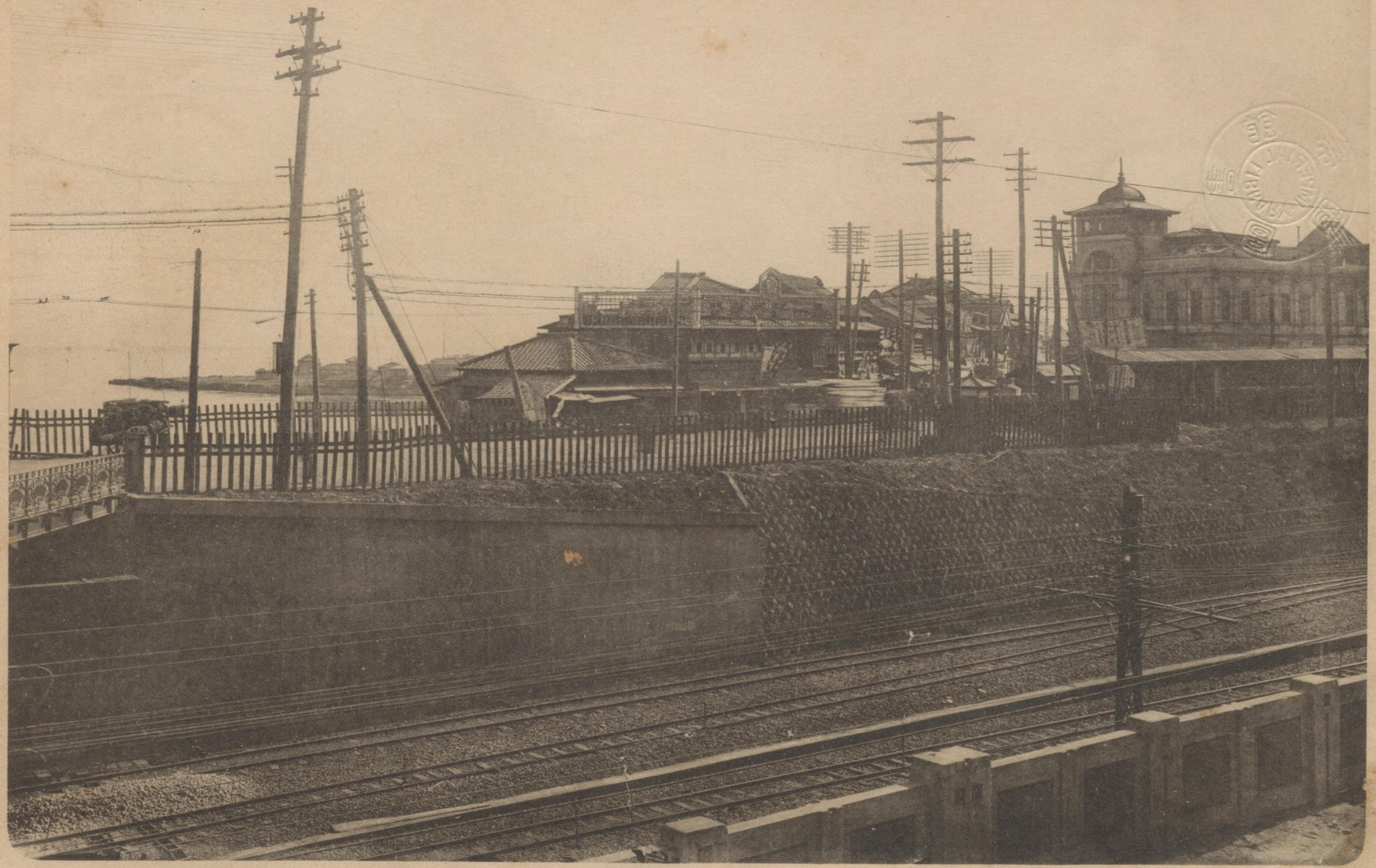
第一　日本橋　（武藏）

Fifty three stages of Tōkaidō was painted by Hiroshige in 1834, and it is said that this work is one of his masteprieces. The environs of Nihonbashi (Bridge of Japan) was the busiest circle of old Edo, also it was the Point from which all distance in Japan, measured. The first bridge was constructed. on 1603 as wooden one.
In the scene we can see some Daimyō procession just passing on the bridge.

一幽齋廣重の『東海道五十三次』は天保五年の作に係る。而して其の振出『日本橋』は即ち江戸の中心にして又四方行程の元標たるのみならず、橋畔の魚河岸は夙に江戸名物の隨一と稱せられ、今尙ほ本邦第一の魚市場として其の名世界に喧傳せらる。さて此の橋は慶長八年幕府の手に依て初めて架設せられたるものにして長さ二十八間、北は室町に通じ南は通町に續き府内南北の大路是に係り橋南の西側を御高札場となし、木橋にして欄干に擬寶珠を施しありしが、維新後和洋折衷の木橋に架け換へ、明治末年更に工費數百萬圓を費して壯麗なる石橋に改め大に其の面目を一新したり。廣重の圖は即ち東天將に紅を潮する朝まだき所謂江戸ッ子の粋を以て誇る看屋等が、今や魚河岸の買出しを終へて市に出づる後ろより『下へ々々』の聲おごそかに大名行列の前驅意氣揚々として橋を南に渡り來れる光景なり。

第二　品川（武藏）

Shinagawa is the first stage of Tōkaidō, and now-a-days the town comunicates with the great Tōkyō, so that it seems rather a part of Tōkyō. In the picture an old-fashiond fortress faced to the Edo bay, which is afterwards called "Kuzure Daiba" (The broken fort)



品川は江戸幕府の南門口に當る要路にして當時品川宿と稱し、東海道五十三驛中第一次の宿なりしが故に來往頗る頻繁にして驛亭を南品川宿、北品川宿、歩行新宿の三區に分ちたり。今、市街の中央に青樓多きは卽ち往年驛次の名殘なり。廣重の圖は舊時の八ツ山より宿場を通して眞帆片帆朝日の影に照り映ゆる品川灣の風光を眺めたるところにして、右端は八ツ山、街路の兩側に櫛比せるは妓樓旗亭、又彼方遙かに海中に斗出せるは後世の崩れ臺場、而して今や街路を寛かに綾り行くは、さる大名の西に向つて此の宿を出で立つ有樣。又寫眞は廣重の描きし場所の現狀にして、當時の八ツ山は切り崩されて數條の鐵軌其の跡を走り、更に京濱電車の起點停車場右手に高く聳ゆるを見る。尙又、左端海上に突出せる岬は、幕政時代國防計畫の俤を殘せる崩れ臺場の舊跡なり。

東海道
五拾三次之内二
品川
宿出立

東海道
五拾三次之内
川崎
渡舟

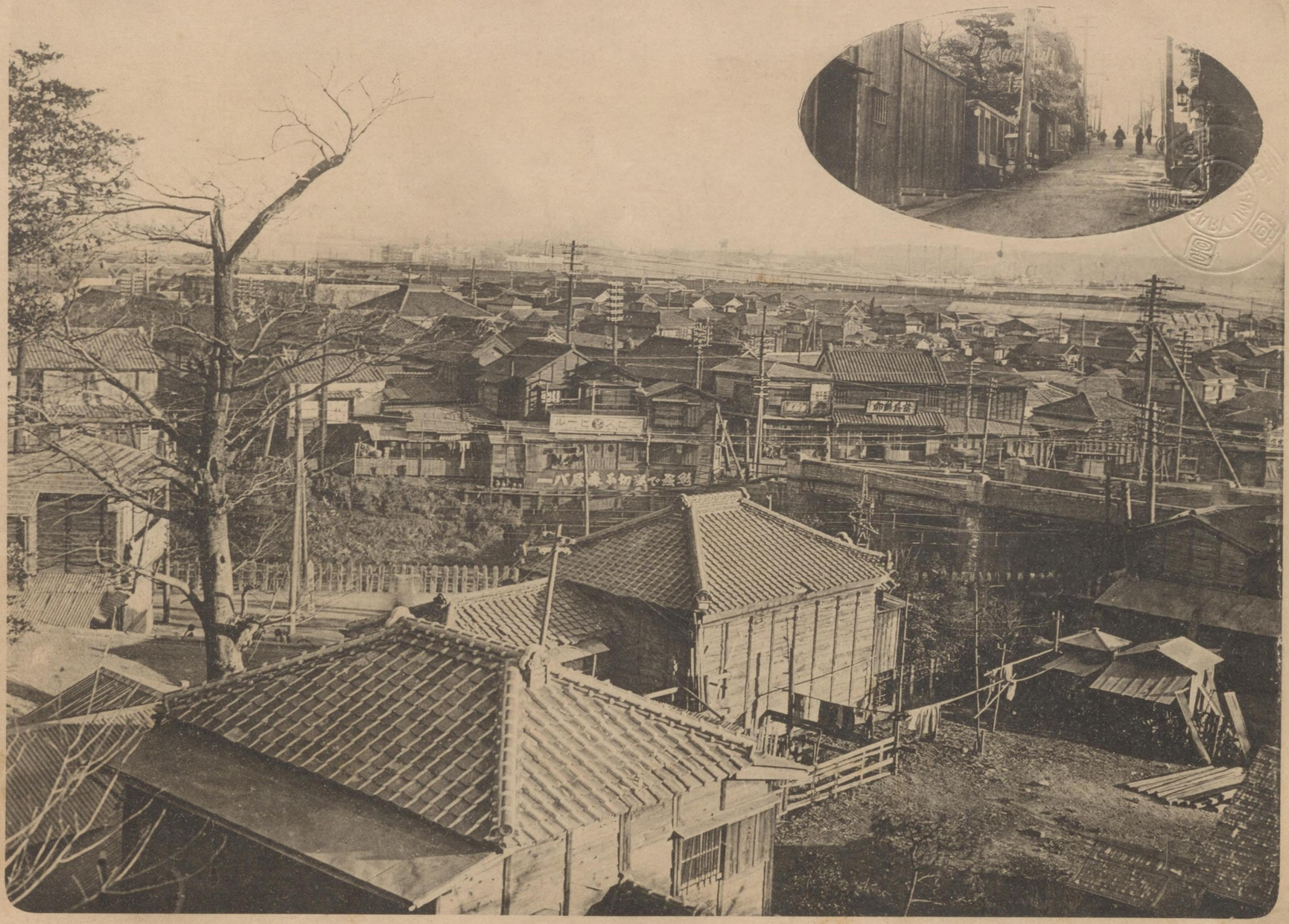
第三　川崎（武藏）

A ferry of the Tama-river is adjoins with Kawasaki town, and there is famous Buddhist temple called Kawasaki-Taishi, so that the town is always flourishing with many devotees.

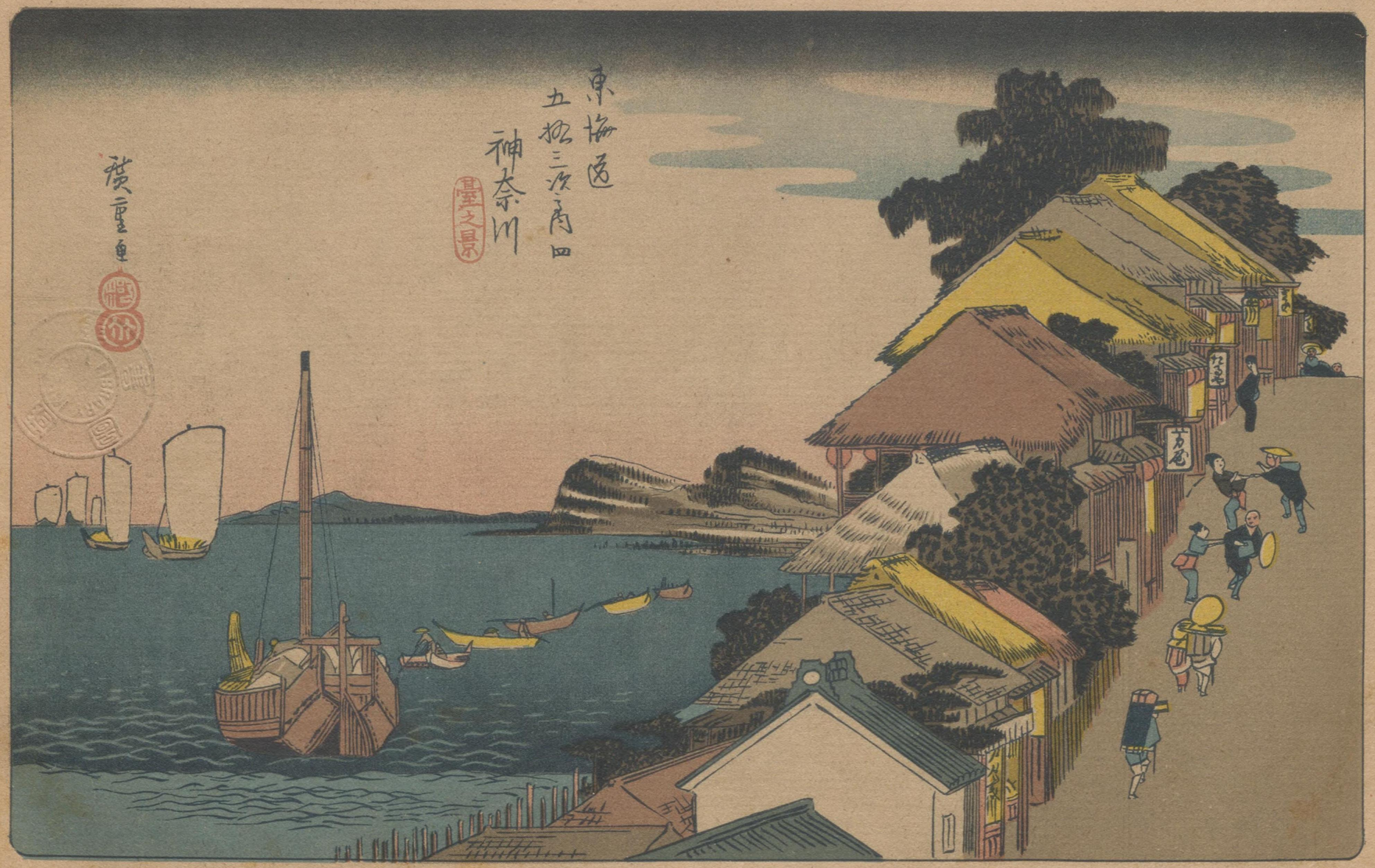
川崎は古の河崎莊にして東海道の第二驛。今の武藏國橘樹郡川崎町卽ち是なり。此地古來有名なる川崎大師の大伽藍を有し附近の地爲めに頗る賑へり。慶重の圖は六鄕渡船場の光景にして、六鄕は今の同國荏原郡六鄕村の地を稱し、其の渡しは同村大字八幡塚より多摩川を挾んで對岸川崎驛に至るものにして今は此の場所に堅牢なる木橋を架し、又別に東海道線及び京濱電車線の鐵橋を設けたれども、夏季豪雨出水に際して奔流往々橋脚を浸し汽車電車の運轉を中止せしむることあり。寫眞は往年の渡船場跡より國道筋の六鄕橋及び川崎町の外廓を眺めたる光景なり。因に史を繙けば永祿十二年甲斐の驍將武田信玄武州の地に討入りし時、北條家の臣行方彈正、當時の六鄕橋を燒き落し以て武田勢の侵擊を阻止したりとあり。上流矢口の渡、又新田義興戰歿の地として其名史上に聞ゆ。

第四　神奈川（武藏）

Kanagawa town is quite near with Yokohama city. In the age of Hiroshige, Yokohama was but a lonely fishing village, nobody knows even its name. But beyond expectation this deserted village became so called Yokohama Port afterward's.



神奈川は武藏國橫濱市神奈川町の地即ち是なり。神奈川は古書に竹野川にも作り、本は細流の名なりしが轉じて地名となり現今は瀧の川と稱へ町を貫きて海に注げり。德川氏の時、此の地は海道の一宿驛となり、安政五年始めて神奈川奉行を置きしが維新の際廢せられたり。廣重の圖は今の神奈川停車場の後方一帶の丘陵に向ひ緩やかなる傾斜を作りて續きたる臺の町の料亭軒を並ぶる光景を描きしものにして、當時は街路の背後まで浪打寄せて海の眺め一しほなりしが、明治初年、橫濱の富豪高島嘉右衞門翁、始めて鐵道の敷設を請負ひ、神奈川灣を埋立て市街地を布きて高島町と名づけたるを以て臺の町の眺めは全く一變したり。即ち寫眞に見る街衢は廣重の圖の海の一部、又右上は臺の町にして、此の邊り今も尙割烹店軒を並べ、僅かに往時の俤を存したり。


東海道
五拾三次之内四
神奈川
墨之景
廣重画

東海道
五拾三次之内
保土ヶ谷
新早橋

第五　程ケ谷　（武藏）

Hodogaya is wes'ern direction of yokohama abont 2 miles. The passengerd of ols, they are accustomes to travel from Kanagawa straight to this town.

程ケ谷は武藏國橘樹郡の町にして又保土ケ谷にも作る。古來五十三次の第四驛に當りしが今は東海道線此處を通過して停車場を設けあり。此地昔は程ケ谷、新町、帷子とて三宿なりしを慶長二年まとめて一驛とすと傳へらる。而して町の西二十町許りを境木と言ひ武藏相摸の國境にして此處に權太坂といふ坂路あり、勾配甚だ急なるが故古來東海道中の一險路と稱せられ坂上よりは神奈川の海を望み風景極めて佳なりといふ。廣重の圖は停車場より東へ七八丁隔たりたる地點を流るゝ帷子川に架せる『かたびら橋』（今はかたびら橋の名廢せられて新早橋といふ）の袂より戸塚の驛を寫したる光景にして、寫眞は卽ち是と同一の場所なり。十遍舍一九の歌に、

『おとまりはよい程ケ谷と泊めをんな、とつかまへては離さざりけり』

第六　戸塚（相模）

Most of stages of Tōkaidō, are situate near sea, but on the contrary the sea few miles away from. Totsuka viltage.

戸塚は相摸國鎌倉郡の町にして郡の中央に位し、程ケ谷より二里十六町、藤澤へ二里、東京日本橋より十一里九町の地點に在り、古は富塚又は土塚に作り吉田庄内の地なりしが五十三驛定めらるゝに及び程ケ谷、藤澤間の驛次となれり。廣重の圖は今の東海道線戸塚停車塲より東へ七八町隔たれる個所より描けるものにして、橋畔に見る米屋は寫眞に於けるが如く現存し依然として米屋を營めり。尤も廣重の當時には此の米屋掛茶屋をも併せ營みしが今は鐵道開通して街道を辿る旅客減じたるがゆゑ掛茶屋は廢業したるなり。而して當家には現に八十餘歳の老媼ありて廣重當時の驛の有樣を尚克く記憶し其の物語るを聞けば徐ろに懷古の情切なるを覺ゆるものあり。圖の石燈籠は今近在の寺院に移され、『こめや』の看板は此家に保存せらるといふ。

東海道
五拾三次之内六
戸塚
元町別道
太々満
京枝満中
神田満中
百味満
月鳥満中
大山満中
ふめや
左りかゆくらく道
茂重画

東海道
五拾三次之内七
藤澤
賀重喬

第七　藤澤（相模）

Fujisawa is a chief town in Sagami province, Yugyōji (a Buddhist temple) is one of the most attractive temples of Japan. Enoshima (a beautiful small Island) not far from this town, and the Island famous in its picturesque view.

藤澤は相模國高座郡の首邑にして今大坂町及び大富町の二區に分たれ境川を以て相隔たる。此地に名高き遊行寺は大富町に在り時宗の總本山にして藤澤山清淨光寺と稱し又の名を藤澤道場と謂ふ。正中二年、俣野五郎の創建に係り時宗の開祖一遍上人より四世の僧呑海上人を以て其開山となす。爾來寺運漸く盛に遊行巡化の事蹟他宗に比して長く異彩を放てり。延文年中足利尊氏寺領六萬貫を寄附し又後小松天皇は遊行僧夫馬の印牒を賜はる。近世に至り寺運漸く衰へたれども尚地域の廣大、建築の壯麗優に東海の一名刹たるに恥ぢざる感あり。寫眞は廣重の描きし場所と同一の個所と思しき地點より遊行寺の伽藍を眺めたる光景にして今樣の橋の袂に白堊の土藏いかめしく構へられ寄席の幟の夕風にはたためける有樣など、今昔を對照すれば一味の感興油然として胸底に湧くを覺ゆるなり。

第八　平塚（相模）

The eighth stage of Tōkaidō is Hiratsuka, and the town stand near beau iful Sagami bay.

平塚は相摸國中郡の町にして相摸川と花水川との間なる海濱に在り。藤澤より三里十七町、大磯へ三十町、今東海道線の停車場を設く。此處より北方に向ひ伊勢原町を過ぎ上粕屋に至る三里餘の道には人力車を通じ尚二十町にして大山町に達し更に登ること二里弱にして大山に達す。頂上に阿夫利神社あり大山祇命を祀り毎年七月の大祭には遠近より來賽するもの頗る多く、平塚は恰も其の通路に當るが故行人雜閙し、又海岸の風光佳なると相摸川鮎漁の興あるとを以て夏日來遊の客少からず。廣重の圖は此の町の郊外を流るゝ花水川に架せる花水橋の此方より高麗山及び富士の遠景を眺めたる光景にして、實眞に於て見るが如き高麗山の姿を瀟逸なる廣重の彩筆が形を、かしく描き出せるなど却々に興深きものあり。

東海道
五拾三次之内八
平塚

東海道
五拾三次之内九
大磯
英重画

第九　大磯（相模）

Ōi o is a magnificent seaside town with many villa, and the Town rather famous about its historical connections.

大磯は相摸國中郡の海濱に臨める一小都會なり。古の餘綾郡伊蘇鄉にして今小磯及び高麗寺村を合併して大磯町といふ。廷喜の頃より巳に驛路と定められ大磯小磯と連稱せらるゝに至りしが、『源平盛衰記』『東鑑』等に其の名の多く散見するを見る。中にも建仁元年六月、源賴家、江の島參詣の途すがら此地に宿し、遊女を聚めて歌舞燕樂を催せしことあり。又かの名高き曾我兄弟が遊女虎及び少將と馴染を重ね、兄弟の討死後、二人の遊女尼となりて操を完うせしが如きは最も遍く人口に噲炙す。尙又詩聖西行法師が秋色の寂びたるを見て、『心なき身にも哀れは知られけり鴫立澤の秋の夕暮』と歌ひたる鴫立澤の閑境は寛永年中俳人三千風が草庵を結びし以來長く俳諧の道場たりし。その海岸即ちこゆるぎの磯にして風光明媚又捨てがたきものあり。

第十　小田原（相模）

Odawara is an old castle town in the bottom of Hakone mountain. Remarkable hotspring Atami is about 10 miles distance from thi stown, also "Hakone Hachiri" (the Hakone Pass) begins from this stage.

小田原は鎌倉時代に於て既に海道の一駅たりしと雖も其名尚ほ著れず、明應四年北條早雲伊豆に起りて當國を略するに及び此地を以て其の府城となす。是より四民來集して漸く繁華となり其の極盛時に於ては鎌倉にも優る觀ありしといふ。然るに天正十八年豐臣秀吉大軍を率いて來り攻め城主北條氏政屠腹して城遂に陷り超えて德川家康の世には大久保忠隣是が主となり更に慶長十九年除封改易せられて稻葉氏入部せしも貞享三年大久保忠朝の封となり子孫相傳へて明治維新に至る。城址今尚町の北方丘上に存し壘廓濠湟の跡歷然たり。廣軍の圖は即ち小田原町の近郊を流るゝ酒匂河畔より城廓及び箱根の峯巒森立せる形勢甚だ雄偉なる樣を描けるものにして今や川には長橋を架し電車の是を通ふなど四邊の風物聊か其趣きを異にすれども山姿水態概ね昔の儘にして河畔の松籟長へに往時の榮華を物語りつゝあり。

東海道
五拾三次之内十
小田原
酒匂川
廣重画

東海道五拾三次之内十一
箱根
横重画

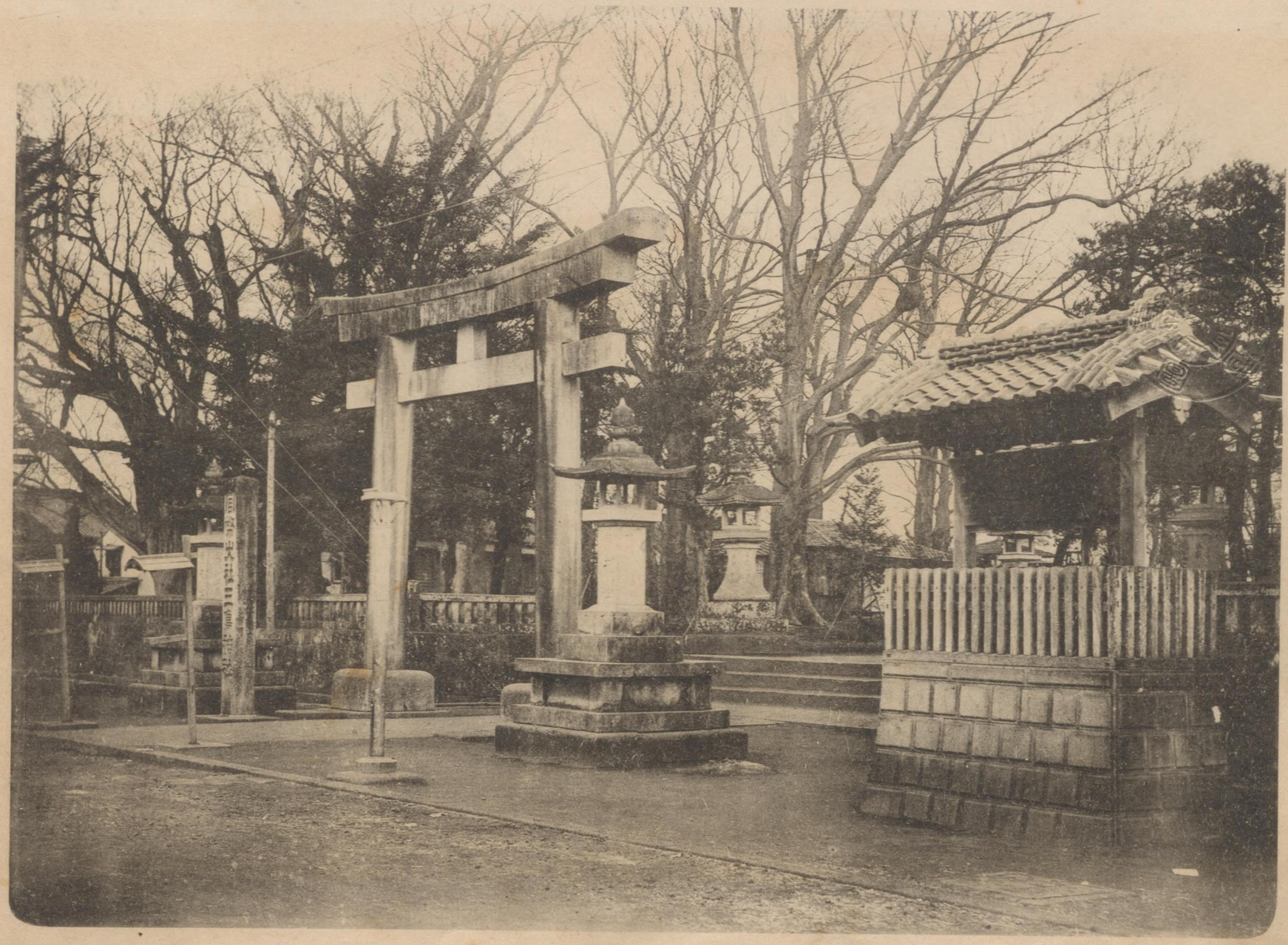
第十一　箱根（模相）

Hakone is rather lonely lakeside village, and Hakone lake is higher than sea level about few hundred feet. The surrounding picturesque ladscape of Hakone in so beauiful, that which is always compared with Geneba of Switxerland.

箱根は坂東隨一の天險にして海道の古驛路その山中を過ぐ、世に箱根八里といふは即ち是なり。而してこの通路は遠く延暦年間始めて開かれしが程なく廢れ、中世以後は足柄箱根の兩道相並んで行旅の往來あり、而も其後驛路屢々變革せられしを以て其道筋明かならず、德川氏の初、山上蘆の湖畔に新關を設け、元和四年、現に舊道と稱するところの大路を開き以て海道の官路と定め爾來明治初年に至るまで蔚蒼たる樹間常に人馬の轡きを絕たざりき。廣重の圖註して『湖水岡』とあり。其地今何處を指せるものにや判明せず、又蘆の湖岸峯巒重疊森立すと雖も尙此の圖に於て見るが如く峯頭突兀峭壁削立するものあるなし。恐らくは是れかの駒ケ岳の山容を描くに廣重殊更奇警飄逸の筆を弄びしにあらざるなきか。遮莫、一幅の畫面才情隈なく汪溢して風物悉く躍動し眞に古今の名畫として推賞するに足るものあり

第十二　三　島　（伊豆）

Between Odawara and Mishima in so called Hakone pass, the town has celebrated Mishima shrine in it.



箱根より西に山中、市山を經て三島に出づ。三島は伊豆國田方郡の町にして徳川時代諸侯參勤の衢に當り人馬の往來多く繁榮を極めたり廣重の圖の三島大社は町の東端に鎭座し中世以降東海道の名祠にして今官幣大社に列す、而して其の創建は何時代にあるか詳かならずと雖も思ふに延喜延長以後の事なるべし。祭神は大山祇命なりとも言ひ又事代主命なりとも稱し未だ確かに定め難し、往昔源頼朝伊豆に兵を起せし際是に祈請し遂に彼の如き戰勝を得たるを以て爾後鎌倉武家の崇敬大に加はり而も其の地海道の衢に當るを以て賽者踵を接し其の名益々著はれたり。境域今尙極めて廣く樓門社殿壯麗にして誠に東海第一の大社たるを失はず。寫眞は廣重の圖と同一の箇所を撮影せるものにして社前の大鳥居、及び是を圍繞して立てる蓊々たる老杉など昔ながらの俤を傳へ神威今更に嚴然たるを覺ゆ。

東海道
五拾三次
之内十二
三島
朝霧
廣重画

東海道五拾三次之内 十三
沼津
廣重画

第十三　沼津（駿河）

Numazu is a chief town of Tokaido; from where the fine view of Fuji yama in superior.
The climate is very sweet and suitable, spe ially in summer season.

沼津は駿河國東倫の一都會にして狩野川口に臨み泊舟の便あり。今、沼津港は東西一町南北三町、但し水淺くして高潮に於ても水深六呎に過ぎず。沼津城は三枚橋城とも言ひ又觀潮城とも稱し同町大字城内に其の址存す。文明年中今川氏創めて築き永祿年中武田氏の有に歸し元龜元年武田氏の將高坂昌宣修補して是に居り、次で德川氏の駿河を領するや松平康親を此に封じ爾來數回主を換へて一時其城廢せられしが安永六年水野忠友幕命に依り是を復興し累世して明治維新に至る。又此地に有名なる千本松原は狩野川口以西海岸一帶の稱なり、白砂の間無數の蒼松繁茂す。傳へ言ふ天文の頃沼津東運寺の開祖增譽上人海風を防ぐ爲めに是を植うと。されど天正八年武田勝頼北條氏と此地に戰ふや敵の伏に備へんが爲め悉く松樹を斧伐したりと言へば今存するは蓋し後人の栽植せるものならんか。廣重の圖、此町の郊外を描けるもの又彼が傑作の一たるを失はざるなり。

第十四　原（駿河）

From Numazu town, about 5 miles south-west Hara village stands in the field of Ukishima.
A picturesqu Ukishima-numa (Ukishima lake) is quite near from the village.

原は駿河國駿東郡の町にして浮島原の中に在れば昔は浮島原の宿と呼べり。抑も浮島原といふは同國愛鷹山の裾、須戸沼附近の原野四五里の間を言ひ、承久三年八月、中納言藤原宗行北條氏に捕へられて此地を過ぎ運命を決せる事あり。又其後源平兩氏の戰場として世に顯はる。『曾我物語』に依れば此の原はもと海なりしを大國より足高といふ山、富士と丈比べせんとて來りけるに樞現蹴崩したれば其山海に浮きて浮島が原となれりとぞ。さて此の原町は中世浮島が原の東邊に建てられたる宿驛にして沼津を距る一里二十七町、吉原へ二里三十五町、今は鐵道停車場あり。名物駿河半紙は、天明の頃里人渡邊某、富士山麓にて紙料に適する一灌木を發見して三極と名づけ此の近傍に培養せしが其後次第に繁殖して遂に今日の如き莫大の産出額を見るに至りたるなり。

東海道
五拾三次
之内十四
原
朝之圖
横重画

東海道
五拾三次
之内 十五
吉原
左宮軍
廣重画

第十五　吉　原　（駿　河）

The fine view of Fujiyama is superior from Yoshiwara stage. Tagonoura (Tago-beech) is few minutes from the staion.

吉原は駿河國富士郡の町にして原より二里三十五町、蒲原へ三里一町、鈴川停車場は東南三十町餘の處にあり。鈴川、大宮間の鐵道馬車是を通過す。而して此の吉原はもと是より東南に當り今の元吉原と稱する地にありしが古來屢々激浪の爲めに漂蕩せられ遂に天和二年の大海嘯に甚大なる損害を被り今の地に移りたりといふ。此の附近名所舊蹟の見るべきもの少からず。即ち先づかの『田子の浦に打ち出でて見れば白妙の富士のたかねに雪はふりつゝ』の歌を以て名高き田子の浦は本郡田子の浦村の海濱を言ひ停車場より約四丁、富士山の眺望海道第一の稱あり。又建久四年夏五月、富士の巻狩に乘じて井出の屋形に忍び入り仇敵工藤祐經を討ち取りたる曾我兄弟の墓は停車場を距る里餘の地、本郡鷹岡村字入江なる福泉寺の境內にあり香煙今尙縷々として盡きず。因に廣重の圖、現狀寫眞是を對照して其間始ど何等の相違なきを見る。即ち『東海道』畫帖中街道の姿、並木の形、山のたゝずまゐ又此くの如く酷似せるは稀なり。

第十六　蒲原（駿河）

At present Kambara is a old fashioned lonely seaside village,
and most of the inhabitants are fishermen.

蒲原は駿河國庵原郡の東南隅に位し富士川の河口に近き海濱に在り。古の蒲原庄は文治年間後白河法皇の御領たりき。宇蒲原の南、古松蒼然たる間に半ば頽廢せる古墳あり、里俗傳へ謂ふ、源義經奥州下向の際、淨瑠璃姫其の後を慕ひて三河の矢作より來り此地に於て憾死せるを土民憐みて其の屍を斂め葬ると。又舊街道の北、町の西なる向田といふ處に蒲原城址存す。永祿十二年、小田原北條氏の將北條新三郎綱重是に據り甲斐の武田氏の大軍を激へて克く戰ひ容易く屈せざりければ、信玄乃ち一策を案じ、陽に退軍して是を誘ひ綱重の城を空うして尾擊するに乘じ、急に勝頼をして城に迫らしむ、綱重殊戰して遂に憤死す。因に蒲原以東富士川に至るまでの間を吹上の濱と言ひ三保の松原を望み風景極めて明媚なり。

東海道
五拾三次
之内十六
蒲原
廣重画

東海道
五拾三次之内十七
由井
広重画

第十七　由比（由井）（駿河）

The stage of Yui is anold fashio ed village. The landscape letween Yui and Okitsu village are most beautiful and comfortable.

由比は一に由井又は湯居に作り駿河國庵原郡の町なり。廣重の圖の薩埵峠は此町の西、興津町との中間なる海邊に沿へる峻坂にして古來東海道の一險阻とせらる、昔は磐城山と稱せしが、中世此の濱に於て地藏薩埵の像漁網にかゝりしを近在なる東勝院といふに安置せしより薩埵峠の名起ると傳へらる。山路よりは富士、愛鷹、伊豆の群峰、由比ノ濱、三保ノ松原等を望み風光極めて明媚なれども、今は新道を南麓の海汀に開き、東海道線の鐵路又是に沿ひ隧道を通じて走る。觀應二年足利尊氏、直義兄弟相鬩ぎて大に此處に戰ひ直義大敗す。當時尊氏の陣營跡は此山の東麓なる尾の上に存せり。又永祿十一年には武田、今川の二氏、同十三年には武田、北條の兩氏此地に兵を交へたり。即ち信玄の築ける砦は此の嶺續きなる陣場山なりと謂ふ。因に太田蜀山人の狂歌。

『山の神さつた峠の風景は三くだり半に書きもつきせじ』

と又以て其の眺望の凡ならざるを想見するに足る。

第十八　興津（駿河）

Okitsu village is one of the most attractive town among Tōkaidō. Mihonomatsubara (a peninsula with pine trees) is few miles away across the stretch of o en sea, Elegant Kiyomizudera (a Buuddhist Temple) stands on a hill of the town.

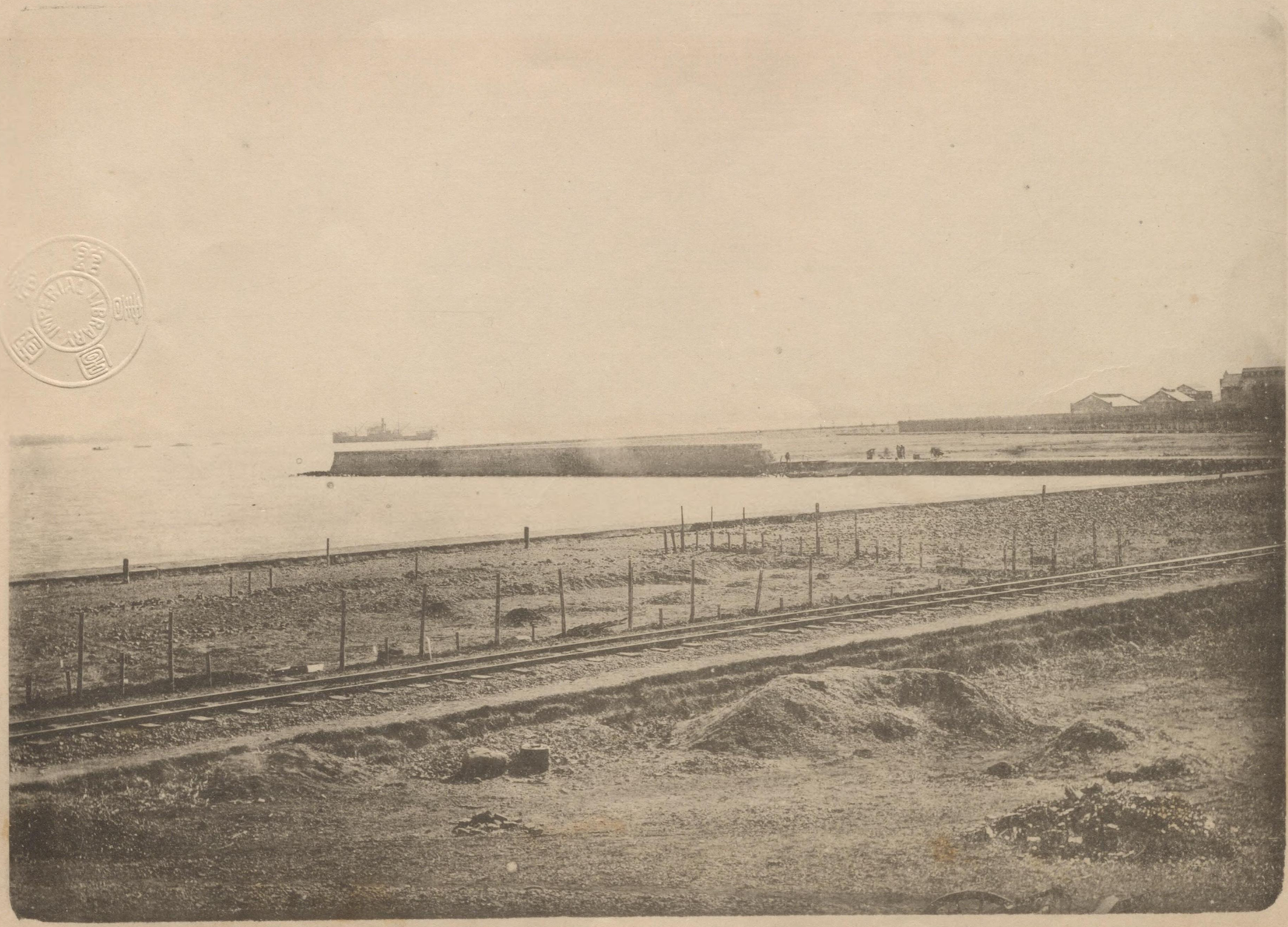
興津は駿河國庵原郡の海濱に在る小都會にして、其名は古く『東鑑』、『十六夜日記』等の諸書にも見ゆ。此地に名高き清見寺は有名なる古刹にして天武天皇の白鳳二年此處に關を置かれし時、其の鎭護として建立すと傳ふ。足利尊氏是を再興し、嘉永年間、又、國主今川氏親護國禪師を招じて中興せしめ海道一の名藍となりしが、德川氏に至り更に大に是を修め舊觀を保たしむ。境內よりは三保ノ松原清見潟、富士山、愛鷹山の眺望あり。殊に秋夜觀月の美を以て世に顯はる。寳重の圖の興津川は源を甲斐の國境惠間峠に發し流程七里古來年魚を以て名あり。又此の川往時は徒涉なりしが明治八年橋を架す。因に永祿十二年、小田原の北條勢、由比の濱邊に來り陣し、駿府の武田勢又來りて此河原に陣せしが、三河の松平勢遠州より來侵せんとするを以て武田勢俄かに陣を撤して退きたりと傳ふ。

東海道五拾三次之内十八
奥津川
奥津
筆者

東海道
五拾三次
廿九
江尻

第十九　江尻（駿河）

Present Ejiri town is adjoins with Shimizu harbour. The harbour situatesone corner of Su.uga bay, and is one of an open port for foreign countries.



江尻は駿河國庵原郡の町にして清水港の西岸に位し、入江、清水の二市街と巴川を以て相隔たる。此地もと海濱の一寒村なりしが武田氏城を築き次で城下町を開き三日市と稱へ遂に驛舍となりたるなり。江尻城は又小笠城とも稱し永祿十二年の築造に係るものなりしが天正年間武田氏の將、穴山梅雪是に居り德川氏に降りて横死し、城は頓て德川氏の有に歸し、同十九年、外廓を毀ちて町家となすといふ。廣重の圖は此の江尻の海岸より海上遙かに三保の松原を眺めたるところ、即ち松原は海波渺茫たる駿河灣上に突出せる一洲にして白砂一路宛然霜の降れるが如き上に青松黛の如く懸るもの長さ里餘、中にも古來謠曲に名高き羽衣の松は、三保神社のほとり松聲靜かなる處にあり、老幹深翠誠に千古の趣きを傳へ、是に對すれば一味夢幻的情調そゞろに胸底に湧くを覺ゆ。寫眞は江尻海岸埋立地の眺望にして右手海上遙かに見ゆるは即ち三保の松原なり。

第二十　府中（靜岡）　（駿河）

City of Fuchu (present Shizuoka), now it is the capital of Shizuoka Prefecture; also one of the main station of Tokaido-Railway. Kunōzan (Buddhist Temple) is few miles south from the city there is the tomb of Tokugawa Ieyasu(the Shōgun)

府中は駿河國靜岡市の舊稱なり。古へ阿倍市といへる市邑より出でたるものにして阿倍市の名は既に『萬葉集』に出づ。今川義忠初めて此處に舘を置きそれより天正の頃まで累世その根據たりしが慶長年間に至りて德川氏の有となる。家康又極めて此地を愛好し諸侯に課して城廓を修築せしめ以て其の晩年を送る。家康薨ずるや其子頼將、孫忠長代る〳〵主たりしが、忠長除封せられて後、幕府の直轄となり、明治元年、朝廷、德川家達（今の貴族院議長公爵）を此處に封じ、駿遠の地七十萬石を賜ふ。翌年八月靜岡藩と改稱し、四年靜岡縣廳を置きて今日に至る。廣重の畫の阿倍川は市の西偏を流るゝ大河なり。而して其の下流賤機山以南は往古は一面の砂洲にして水流の變易常なかりしが、慶長年間南賤機村より河口に至るまで長さ二千餘間の大堤を築き、激湍には石を疊みたる爲め爾來河流一定するに至れり。

東海道五拾三次之内二十
府中
安部川

東海道
五川之次之内廿一
鞠子
名物茶店
廣重画

第二十一　丸子（鞠子）　（駿河）

Mariko i a little village. From Shizuaka about 5 miles west, and it stands ust at the bottom of Utsunoya pass.

丸子は駿河國安倍郡長田村の大字にして鞠子又は麻利子に作る。其位置宇津谷峠の東口に在りて靜岡より一里十八町、岡部へ二里なり而して其の誓願寺は源頼朝の建立するところ、現在の本堂、庫裡、書院等は天文年中僧文益の再興に係り寺中に片桐且元の墳塋あり。又柴屋寺は臨濟宗に屬し宗長法師の創建するところなり。宗長は連歌の達人にして國主今川氏親の和歌の友なり。永正元年の頃丸子に庵を結び柴屋軒と名づけ爰に住みしが死後轉じて寺となすといふ。尚又、丸子城址は今俗に三角山又は城山といふ頂上に千疊敷といふ坦地あり周邊僅かに殘壘の址を認む。因に此地の名物とろゝ汁は昔より名高きものにして廣重の圖のとろゝ汁屋は當時十軒ほどもありしが今は鶴眞に見るが如きもの僅かに二軒存するのみなり。芭蕉の句に

『うめ若菜まりこの宿のとろゝ汁』

第二十二　岡部（駿河）

Present Okabe is not so stirring as it was, because Tōkaidō-railway do not pass the town. But fortunately traverers who will can receive the mood of old Tōkaidō.

岡部は駿河國志太郡の町にして宇津谷峠の西に位し丸子より二里、藤枝へ一里二十九町あり。此地の岩鼻山上には西住法師の墓ありて存す。西住はかの詩聖西行法師の高弟なりしが此處にて寂せり。西行袂別の歌に曰く

『もろともにながめ〳〵て秋の月ひとりにならんことぞ哀しき』

さて廣重の圖の宇津の山は前に言へる宇津谷峠にして志太郡と安倍郡との境に跨り餘脈南に走りて海に入る。『伊勢物語』に其の名見ゆれども當時は尚ほ一の間道にして驛路にはあらず、全く官道となりたるは平安朝の末なるべし。歌人在原業平の感興せる蔦の細道は東海道舊道の南方にある小徑にして岡部町字内容に屬す。明治九年此峠の中腹に隧道を穿ちて國道を通じ自由に車馬を往來せしむ。寫眞は即ち其の新道を撮影せるものなり。

東海道五拾三次之内 廿二
岡部
宇津之山

東海名
五拾三次
四内廿三
藤枝
人馬継立
黄重勇

第二十三　藤枝（駿河）

Present fujieda still is a Local town, though Tōkaido-Raiway runs little far from the town.

藤枝は駿河國志太郡の首邑にして岡部より一里二十九町、島田へ二里十五町の地點に在り。此地の宿驛たりしことは『東鑑』に岡部、藤枝、島田と記せるに徴しても其由來甚だ古きを見る。承久年間、參議飛鳥井雅經、東へ下るとて藤枝にて

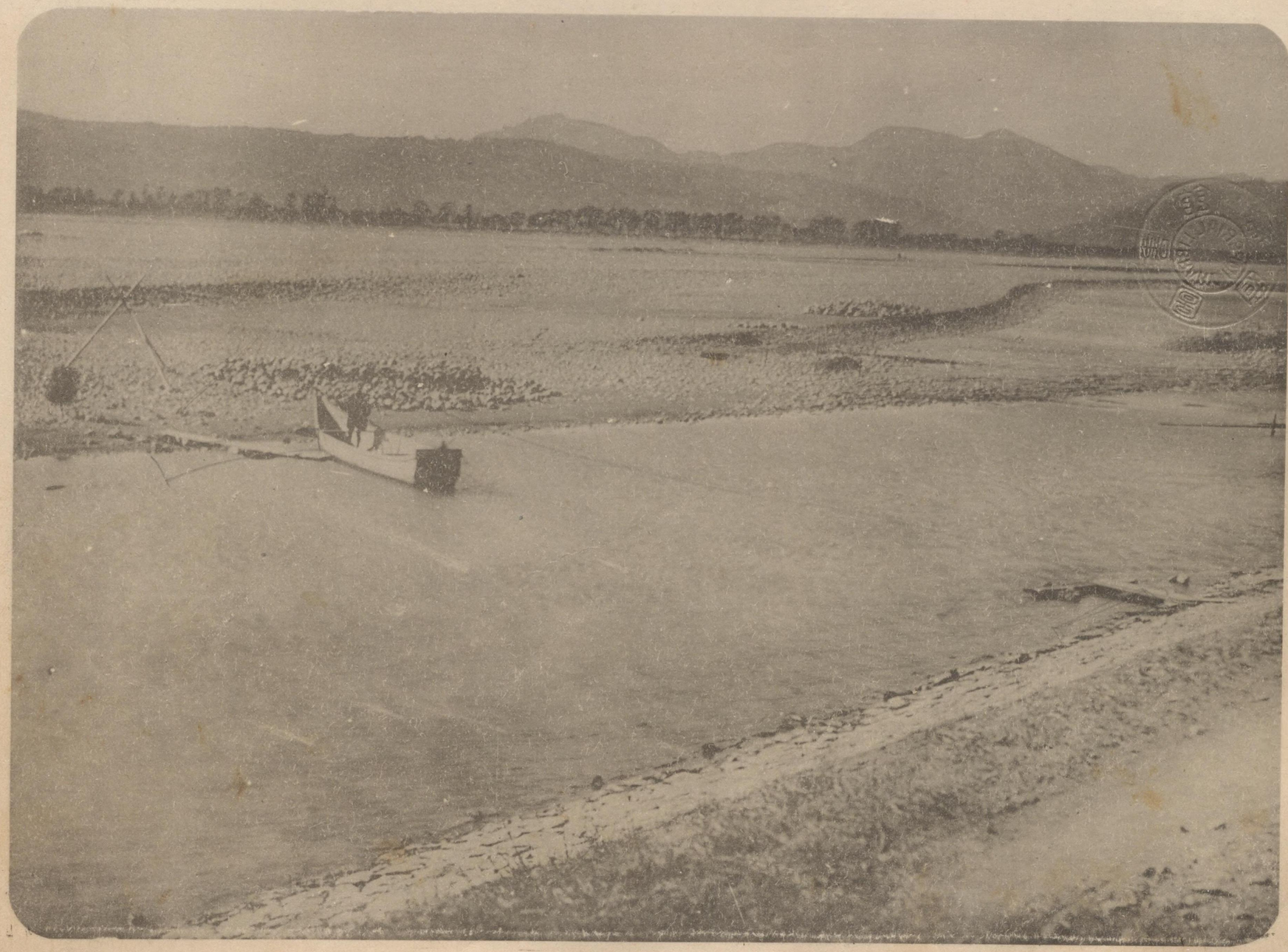
『春を待つなげきは誰もあるものを同じ枯葉にふぢ枝の里』

と詠めること『明日香井集』に出でたり。此地に名高き鬼岩寺は字鬼岩寺に在り。樗巖山と號し僧行基の開基と傳へ手刻の觀音を本尊とす。寺中に眞言岩又は鬼岩と稱する巨岩あり、縱横八間許、又古刹蓮生寺は熊谷直實入道蓮生の創建と傳へ今大谷派本願寺に屬す。因に廣重の圖の宿場の跡には寫眞に見るが如く藤枝警察署を設けられ此のあたり全く風致を一變したり。俳人芭蕉の名句は此驛にて吟ぜしものといふ。

『駿河路や花たちばなも茶の匂ひ』

第二十四　島田（駿河）

The opposit shore of Kanaya is himada Town. The traverers from Kyoto to Edo they did their preparation to cross the river just as the traverers as Kanaya side.



島田は東海道の一名驛にして駿河國大井川の左岸に位し川を隔てゝ遠江國金谷と相對す。海道の此地を通過したるは中世以降の事に屬し古は駿河の小川より川を渡りて遠江の初倉に通じたりといふ。慶長九年大井川大洪水ありて島田の人家を東へ押流し河筋にも大變變を生ず。依て西北の丘上に假驛を立てられしが數年の後舊地に復す。さて此の川は海道屈指の長江にして其の初めて物に見ゆるは『日本紀』仁德天皇の條とす。德川幕府時代には此川を海道の要害と見做し嚴に架橋渡船を禁じたりしがゆゑ人馬皆是を徒渉せり。而も行人多くは其の深淺を知らざるを以て人足を雇ひて其の肩に倚りたりき。明治維新後從前の禁を解きて渡船を置き更に明治十五年には長さ七百二十間の木橋を架し、同二十二年には堅固なる鐵道橋梁を架すに至れり。元祿三年俳人芭蕉此地に到り句あり曰く

『宿かりて名をなのらする時雨かな』

東海道
五拾三次廿四
嶋田
駿河
大井川
岸

東海道
五拾二次
之内廿五
金谷
大井川遠出
殘重画

第二十五　金谷（遠江）

Though the riverside village Kanaya was small, but all traverers took a hand-barrow at this village, because Tokugawa Authority prohibited to make bridge across the river.

金谷は遠江國榛原郡の町にして東海道の西岸に居り駿河國島田町と川を隔てゝ相對す。此驛のこと古は聞えず、宗祇の『名所方角抄』に佐夜の中山の方にカナヤといふ宿ありと記せるを初めとす。蓋し文明年間同國菊川の宿衰頽し是に代りて起れるなり。大井川の渡口は宿の北に在り。大井川は島田の項にも述べたるが如く德川時代戰略上架橋渡船を嚴禁したるを以て行旅の人は必ず人足を雇ひて所謂『川越』をなせり。川越とは或は蓮臺に踞り又は人の背肩に負はれて渡渉するものにして其の人足は川の兩岸なる島田、金谷の二驛に於て無慮七百名ありたり。而して兩驛には川會所ありて是を支配し大水の時は河留と言ひて渡渉を許さず、故に出水ある毎に東西兩驛の客舍悉く旅客を以て塡充し、一驛二宿も後に戻りて水の退くを待たざるべからざりき。

第二十六　日坂（遠江）

Nissaka li'tle far from Tōkaido main line and the village is comparatively we'l known among traverers, because it has Yonaki stone.
(a traditional stone) in village

日坂は遠江國小笠郡の西北に在る一宿にして昔は西坂と呼び、小夜の中山の西坂の義なりしが訓を訛りて日字を用ゐるに至れり。而して其の小夜の中山は古來夜啼石を以て有名なる處にして夜啼石はもと頂上より果約一町を下りたる路の中央に在りしが、今は久延寺の邊りに移せり。さて此の夜啼石の事は數說ありて何れとも定め難けれども俚俗傳ふるところに依れば、往昔旅の婦人此處にて賊に害せられしに胎内の子其の傷口より生れしを近き處の者共拾ひ上げ、飴の餅を與へ養育せしに長じて大和の名高き刀研ぎの弟子となり遂に母の仇を復せりといふ。夜啼石は遭害の時婦人の怨念是に留り夜中呪聲を發せしが、後、弘法大師の功力に依り解脫せりと說く。今久延寺の本尊を子育觀音と言ひ、坂の頂上に夜啼石、姙婦塚などあり、又山中には名物飴の餅を鬻ぐ。

『旅ごろも夕じも寒きさゝのはのさやの中山あらし吹くなり』（衣笠右大臣）

東海道
五十三次
之内廿六
日坂
佐夜中山
貨重画

東海道
五拾三次
之内廿七
掛川
秋華遠貞
廣重画
保永

第二十七　掛川（遠江）

Near the village of Kakegawa there is celebrated Akiba shrine. The color prints shows the road to the shrine and its Tori-i (The sacred gate)

掛川は遠江國小笠郡の町にして日坂より一里三十三町、袋井へ二里二十三町の地點に在り。掛川の名義は驛路の北を流るゝ川に懸崖ありて宿驛の狀をなすに因むといふ。町の北なる山岡には掛川城趾あり。城は今川氏の臣朝比奈備中守泰熙の築くところなりしが永祿十二年今川氏眞駿河を逐はれて此處に來り、朝比奈泰朝に賴る。德川家康乃ち攻めて是を取り氏眞小田原に逃る。天正十二年石川家成の領となり同十八年豐臣氏是を山内一豐に賜ふ。爾後城主の變替十餘度なりしが延享三年太田資俊封ぜられて世襲明治維新に至れり。又廣重の圖に見る秋葉山は天龍川の東岸に聳え山上に鎭座する秋葉神社第一の鳥居なり。因に此地古來葛布の名產地として名高く、古は驛亭の軒に掛けて鬻ぎけるにや。を寫せるもの、鳥居は即ち秋葉神社第一の鳥居なり。因に此地古來葛布の名產地として名高く、古は驛亭の軒に掛けて鬻ぎけるにや。

『これもこのところ習ひと門ごとに葛てふ布をかけ川の里』（藤原爲相）

第二十八　袋井（遠江）

From Kakegawa about 7miles there stands Fukuroi village. The color prints of Hiroshige shows some tea-house near the village.

袋井は遠江國磐田郡山名町の大字にして掛川より二里二十三町、見附へ一里二十三町、今東海道線の停車場あり。抑も此の磐田郡は同國六郡の一にして地勢北半は山岳連亘し三河に至り白倉山、權現山等あり。天龍川其の東境を限り其水郡を橫斷し西界を成して海に入る。川の東には光明山あり、其南は磐田原と呼び高原に至りて盡く。又原の東は太田川の岸、西は天龍川の岸にして冲積層より成り郡内主要の生産地にして村落多く此處に在り。道路は古來の東海道、郡の南偏を橫ぎり袋井、見附、中泉の三驛を置きて西に通じ別に東海道線の鐵道は亦是に沿うて西走し袋井及び中泉の二驛を置けり。尙又袋井よりは周智郡森町に至る間鐵道馬車の便あり。北遠の茶、椎茸、材木等多く此處に集る。廣重の圖は袋井の宿外れ出茶屋の有樣を描けるもの寫眞は即ち昔茶屋の在りし場所を撮影したるなり。

東海居
立初三次
之内廿八
袋井
出茶屋圖
熊重
水堂

東海道
五拾三次
之内廿九
見附
天竜川圖

第二十九　見附（遠江）

The next of Fukuroi is Mitsuke. A river of the color prints of Hiroshige called Tenryū, which runs about 150miles from its upper reaches.

見附は遠江國磐田郡の町にして袋井より一里二十三町、中泉へ十八町、掛川と並びて今や東遠江の大邑なり。地形恰も藥研狀をなし其の高所は富士の觀望によろしきより見附臺の稱あり。尙見附の稱は遠く『源平盛衰記』にも見え古へ國府の所在地なりき。卽ち其の國府は此の附近より中泉町に亘りたる所に在りしかば見附府又は見附の國府など呼び、戰國の頃には今川了俊玆に居り、元龜三年十月には德川家康、武田信玄の軍を逆擊して却て大に敗れたることありたりき。廣重の圖の天龍川は信濃國諏訪湖に其の源を發し木曾、赤石兩山脈の間を南奔して遠江にては龐玉川といひ、靈龜以前に在りては今の馬込川の筋を流れたりしが靈龜元年劇烈なる地震ありて沿岸覆沒し神龜天賓に至り水害相次ぎ河道變遷し遂に今日の如き形となりたるなり。

第三十　濱松（遠江）

Hamamatsu a prominent town in Tōkaidō. It was castle town in Tokugawa era, Hiroshige painted near the town but now it is difficult to find out where it is. Photograph shows the suburb of the town.

濱松は古來駿河、三河、信濃諸街道の要衝に當り東海道の一名驛たり。而して其の濱松城址は市街の北に在りて新古二あり。古城は又引間城と呼び正長元年松尾信濃守の築くところとなりしが、永平十一年大河内貞綱是に據り今川氏親と戰ひ城陷りて貞綱敗死す。天文永祿の頃には飯尾豐前守乘連城主となり、元龜二年德川家康岡崎より移りて是に居りしが　天正五年に至り本多作左衛門に命じて此の附近に新城を築かしめ翌年是に移る。同十八年家康關東に移封せらるゝに及び豐臣氏の將堀尾吉晴十八萬石を以て是に代る。關ヶ原の役後は德川氏其の舊臣をして守らしめ弘化二年井上河內守春正封ぜらるゝや食邑六萬石、子孫世襲して明治維新に至る。廣重の圖は濱松の町外れより城閣を眺めたる光景にして、其の描きたる地點今判明せず。

東海道
五拾三次
之内三十
濱松

東海道
五拾三次之内
三十一
舞坂

第三十一　舞坂（遠江）

Maisaka stands upon the lake Hamanako, and the opposit shore of the village is Arai. Hiroshige painted in his color prints the surrounding view of the ferry.

舞坂は遠江國濱名郡の町にして濱名湖口今切の東に位し濱松より三里六町、新居へ一里七町あり、而して其の濱名湖は濱名、引佐二郡に依り包圍せられたる一大半鹹湖にして東西七里、南北殆ど十里、沿岸出入して支灣甚だ多く東北に引佐の入江、西北に猪鼻湖あり。正面は今切を以て大洋に通じ其間一町五十間、此處に一長橋を架し名づけて濱名橋といふ。此湖は滋賀の淡海に對し遠淡海の國名の起りし所以にして往古は濱名川に依りて外海に通じ其間極めて狹窄なるを以て全く淡水なりしが、明應七年八月の地震洪浪に依り濱名川閉塞せられて其の東に新たに今切といふ門溝開け、海潮擅まに侵入して遂に今の如く半鹹湖となれり。廣重の圖は幕末此の今切に橋梁の設けなく渡船を以て往來せし頃の有樣なれども技巧作爲の跡甚だしく實景とは大に其の趣きを異にするものあり。

第三十二　新居（荒井）（遠江）

Arai village in the province of Tōtōmi, now a little country market village. The. Hamana lake upon which it stands. Most of travelers inTokugawa age they are passed this lake with ferry boat to opposit Maisaka side.

新居は遠江國濱名郡の町にして又荒井にも作り濱名湖の今切を挟んで舞坂町と相對す。而して往時は舞坂との間を渡船を以て通ぜしが風浪險惡、而も陸路は極めて迂遠なりしより『舞坂一里、船に乘るも馬鹿、乘らぬも馬鹿』といふ諺を生ぜし程なり。然れども婦女子の如きは多く此處を避け陸路を迂廻する姫街道に寄りたりき。明治十四年、今切の地に架橋す。名づけて濱名橋と言ひ其の長さ土堤を合せて二千六百餘間、宛として長蛇の如し。廣重の圖は今切より遙かに新居の關を眺めたる有樣にして此關は慶長五年幕府の設くるところなりしが、後、吉田の城主松平伊豆守の管守に係り、東海道に於ては箱根と並び稱せられ檢査嚴密を極めたり。寫眞は即ち海岸埋立地より其の關址を望む光景にして中央數株の老松婆娑たる影を投ぐる邊り即ち關の在りし處なり。

東海道
五拾三次之内
荒井

東海道
五拾三次
之内 三十三
白須賀
汲見阪圖
廣重画

第三十三　白須賀（遠江）

Shirasuka is a village in Tōtōmi Province, Hiroshige painted from a hill called Shiomigaka just near the village. The sea over the front view is Pacific Ocean.

白須賀は遠江國濱名郡の町にして三河國境に接するところに在り。新居驛より一里二十九町を隔つ。元祿年中までは町の東南なる潮見坂の下なる海濱に在りしが屢々海嘯の襲ふところとなり幾たびか壞敗に歸したるを以て頓て現地に移るといふ。即ち今もその海濱に本白須賀の地名存す。永祿年中、井伊氏、今川氏に背きて此の地に火を放ち民家を燒盡したる由『甲陽軍鑑』に見ゆ。廣重の圖け即ち潮見坂上より本白須賀の寒村を隔てゝ音に名高き遠州灘の海波漂茫たる大景を蕭々として下りゆく行列の姿も床しく、眼下に開くる紺青の海のおもてには長閑なる漁舟點々として泛び漂ひ宛として一大パノラマを展開せるが如きもの又以て彼が傑作と稱すべきなり。

『沖つかぜ音も高師の山越えて打ちよす浪のしらすかの濱。』（雅經卿集）

Present Futakawa a lonely village with peasantlies, though it is near to sea but no port.
Thet calor prints looks like the outskirt of the village.

二川は三河國渥美郡の町なり。渥美は『和名抄』に阿豆美と註して幡太、和地、渥美、高蘆、磯部、大壁の六郷に分てり。地勢南西に延びて一大半島を成し北に渥美灣を抱き南は遠江灘に面しと全郡殆ど山陵連亘し遠江灣に面するところは懸崖海に迫りて一の錨地をも見ず唯だ僅かに魚鹽の利あるのみなり。而してその二川町は舊東海道の二川驛と其の附近とを合併せる新稱にして一時大川町と呼びしが明治三十九年、谷川、細谷、小澤の三村を合せて今の名に改む。鐵道東海道線の二川停車場あれども今は旅客少く居民その多くは農業に從事す。大字二川は即ちもとの宿驛にして近年は生絲の製造を以て其名著はる。廣重の圖の猿ヶ馬場は其跡定かならざれど小松の疎らに生ひ茂れる丘陵は今も尚ほ此の邊り目路の限りに連りて豐橋砲團の兵士等が好箇の演習地となれるなり。

東海道
五拾三次
之内卅四
二川
猿ヶ馬場
廣重画

吉田
豊川橋

第三十五　豐　橋（吉田）（三河）

The castle town Toyohashi formerly called Yoshida. The castle which painted by Hiroshige on the color prints, now became the barracks of the Army Division. It is still numbered as one of the principal towns among Mikawa province.

豐橋は三河國の市にして豐川の南岸に位す。近世までは吉田と稱へ松平氏七萬石の城下なりき。而して廣重の圖の吉田城は町の北偏に在り、今第十五師團司令部及び諸隊の營所を設く。城は戰國時代、今川氏の命に依り牧野古白の城くところ、天文元年五月松平清康この城を攻めて陷れ、更に永祿七年五月には德川家康是を取り、下つて天正十八年に至り池田輝政入部して當國十五萬石を食みしが、輝政更に播州に移封の後は屢々城主を變へ、正德二年以後松平氏の有に歸し世襲して明治維新に至る。森春濤の詩に、

『招客古誰稱吉田、樓佳妓妙久喧傳、倚欄長袖麗斑縞、露指摻々最可憐』

と。更に俗謠として名高きものに、

『吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子のふり袖で。』

第三十六　御油（三河）

Between Toyohashi and ~~Aka~~ Aka the little village Goyu stnds, now it is only regarded as a seabathing place.

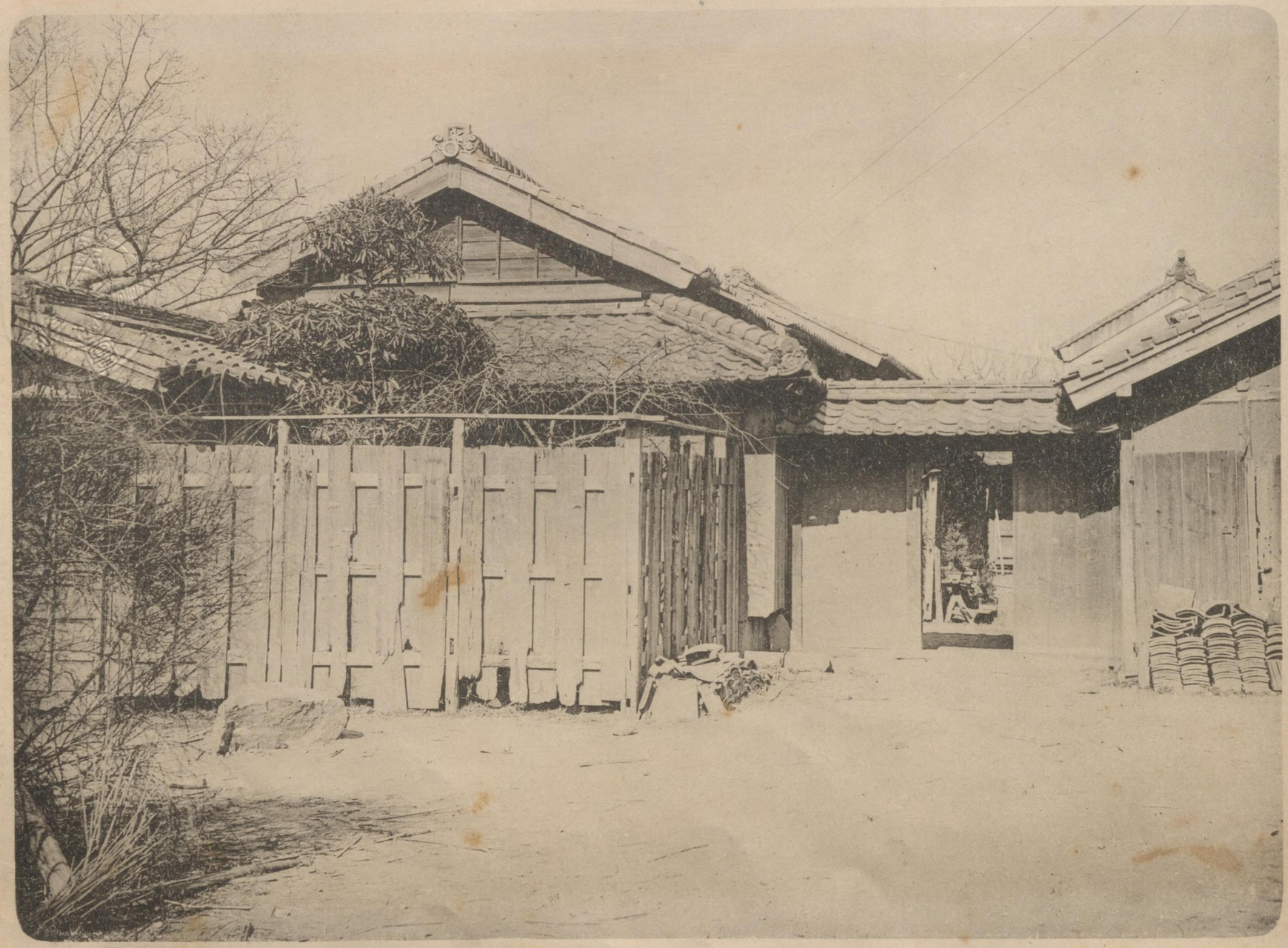
御油は三河國寶飯郡の町にして郡の中央に位し、豊橋より二里二十三町、赤坂へ十六町、今東海道線の御油停車場は町の南一里、御津村に在り。御油の名はその昔持統天皇が宮路山に御駐蹕の時、油を献じたるに起ると言ひ傳へ中世は五井又は五位に作れり。戰國の時代には松平信光の七男元芳の流是に城きて居り御油松平と呼べり　今其の城址を狐屋敷と稱す。寫眞は廣重の圖と同一の個所を寫せるものなれど驛勢衰へて當時の俤を失ひ夏期僅かに海水浴客の往來するを見るのみなり。因に前述持統帝御駐輦の跡宮路山といふは御油赤坂の邊より長澤を經て額田郡二村の山中に至る峯巒を謂ひ、宮路また宮道にも作り、宮道天神の名、當國神名帳に見ゆ。建久元年源頼朝上洛の歸途この山中に宿せることあり。蓋し當時に於ては此地海道の驛路に當りしなり。

東海乃
五拾三次
之内卅六
御油
旅人留女
東海乃續画
彫工治郎兵工
摺師平兵衛
一立斎圖

東海道
五拾三次
之内 廿七
赤坂
旅舎松緑向
廣重画

第三十七　赤坂（三河）

The Tokugawa period Akasaka village bustled with travelers every day, and by that reason there was so many hotels. so that Hiroshige painted its view.

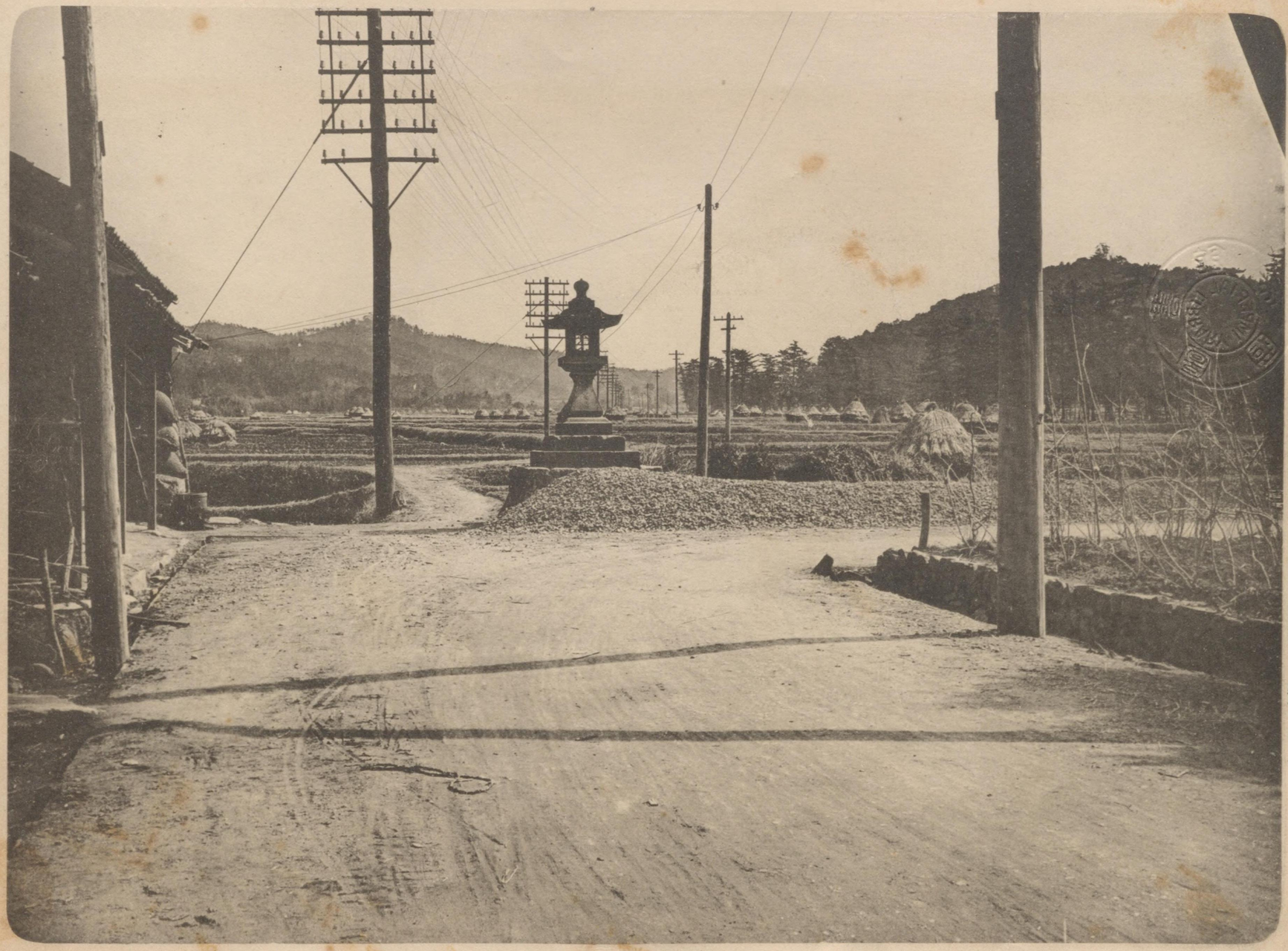


『夏の月御油より出でゝ赤坂や』芭蕉

其の赤坂は三河國寶飯郡の町にして御油より西十六町、岡崎へ四里二十町の地點に在り。此の驛昔は妓樓多く甚だ賑しき地なりしが、今東海道鐵道此處を通過せざる爲め寂寥を極むるに至れり。德川幕府の頃には遠州中泉代官所の出張所ありて三河の公領を支配せり。昔、一條天皇の朝、大江定基三河國守となり在任するや、此地の長者の女力壽の容姿端麗なるを見て太く是を寵愛せしが、力壽俄かに病を得て卒せしかば定基發心入道して圓通大師となり近郊に長福寺といふを建立して其の靈を弔せりと傳ふ。廣重の圖の旅宿は此驛の中程に在りて村本屋と呼び庭前の大蘇鐵を以て名ありしが、今を距る三十四年前火災に罹り、同時に旅宿を廢業し、蘇鐵は同國新城町の大善寺に奉納したり。當主二村權左衛門、今健在して農を營む、寫眞は即ち其の家なり。

第三十八　藤川（三河）

Next stage from Okazaki about 5 miles is Fujikawa, and it was a busy town in Tokugawa age, but since Tōkaidō line opened suddenly it became a lonely county village.



藤川は三河國額田郡に在り。而してその額田郡は三河十郡の一にして地勢大部は山岳連亘し、矢作川、郡の西境を限りて南流し其の沿岸僅かに平地を見る。郡中の水は集りて大平川となり西走して矢作川に入る。土地磽确なれども耕作普く行はれ比較的農産物の收獲多し藤川は岡崎の東南約二里の山中に在りて鐵道布設前までは旅客の往來頻繁なりし爲め可なりの賑ひを呈しゐたれども東海道線開通後は次第に寂びれ來り今は村民多く農業に從事しつゝあり。堯孝の『覽富士記』に此地にて

『誰か住む都のたつみしかはあらで此のあづま路の宇治川の里』

と詠みしは藤川を宇治川と聞き誤りたるものならん。寫眞は即ち此の宿の棒鼻を撮影したるものにして、彼方に續ける街道の松並木や鄙びたる藁積、佗しく殘れる一基の石燈籠を見てあれば荒びゆく古驛の情景哀れにも亦興ふかく感ぜらるゝなり。

東海道
五拾三次之内
藤川

東海道五拾三次之内三十九
岡崎
矢矧之橋
廣重画

第三十九　岡崎（三河）

Okazaki is a city in Mikawa province, and it is little far from Tokaido main line. Hiroshige painted a celebrated bridge over the Yahagi near the city.

岡崎は古來徳川氏創業の地として其名著はれ今は市として國内第一の都會たり。廣重の圖は矢作川及び矢作橋を隔てゝ遙かに岡崎城を望める光景なるが、その矢作は箭作又は矢矧にも作り、架橋の時代は明かならざれども豊太閤の幼年時、一夜此の橋の上に於て岡崎の豪士蜂須賀小六と相識りしは史上に名高き語り草なり。又岡崎城は後花園天皇永享年中、徳川氏の遠祖松平泰親是を築きて占據し天文十一年十二月徳川家康此に生れたり。家康六歳にして今川氏に質たりしが、永祿三年五月十九日義元の桶狹間に敗死するや同二十三日始めて當城に還るを得、爾來頻りに其の勢ひを伸展して遂に天下を掌握するの基礎を成したり。天正十八年家康關東に封ぜらるゝや此の城を田中吉政に賜はりしが其後屢々主を變へ、明治六年本多忠肅入部してより世襲して明治維新に至り、今、城址を公園となす。

第四十　知立（三河）

One of important towns at Mikawa plain is Chiriu. Though it is separated with Tokaido main line, but light rail way is connecting with the above line.

知立はもと池鯉鮒にも作り三河國碧海郡の町なり。而してその碧海郡は地勢第四紀層の高地より成り昔は水利甚だ悪しかりしを以て安城ケ原等の原野多く海岸地方の外は發展極めて遅かりしが維新後明治用水の開通以來、荒蕪の地良田となるもの多く產業頓に發達して今は三河國中第一の實力を有するに至れり。さて知立は今碧海郡役所の在るところにして岡崎より三里、鳴海へ三里の地點に位す。廣重の圖は昔より名高き此地の馬市を描けるものなるが、馬市場は驛の入口の右側に在りて今尙毎年是を開催し非常の賑ひを呈するなり寫眞の左、松林中に長き小屋の横はれるは即ち厩舍にして此くの如きもの數棟並列せり。因に昔烏丸光廣關東下向の折此地に到り着きて兎ある旅籠に宿りけるに、晩食の膳に鮒の附きたれば興じて一首の狂歌を詠めりき。曰く

『この里の名に負ひたりとお肴の料理をしたる池の鯉鮒。』

東海道
五拾三
次之内 四十
池鯉鮒
馬市

東海道五拾三次之内
四十一鳴海
名物有松図
英重一男

鳴海（尾張）

The name of "Narumi shibori" (a variaegated cotton cloth) is far more celebrated than the name of the village Narumi as a stage of Toka'do, at present the indus:ry of the cloth nearly ceased, and l ecame a simple country village.

鳴海は古書に成海又は鳴身に作り古來東海道の驛路にして海濱に在りしが、海中漸く干潟となりて今は海岸より一里餘を隔てたり。其の海上を鳴海潟または宵の月の濱と稱し昔より多く歌に詠まれたり。而して此地は鳴海絞一名有松絞の產地たるを以て其名世に高し。

『昔より千代のちぎりや有松に千しほ八千しほくくりこめけん。』（季　鷹）

廣重の圖は鳴海の驛にて此の絞染を賣れる店を描きたるものなるが、今此の町に就きて見るに街道に面する處に此くの如き商店を見出し能はず、試みに古老に聞けば、是れ恐らくは此の町に相接する有松に於て寫せるものならんと。乃ち有松に赴き初めて聊か圖に似通へる實景を得たり。『續古今集』に鳴海寺にて光俊の詠める、

『あはれなりいかになるみの果なれば又あとがれて浦つたふらん。』

第四十二　熱田（宮）（尾張）

Former Miya now called Atsuta, as a partion of Nagoya City, in Owari province. The most of traverers of Tokaido in the Tokugawa period, They were to cross over Ise sea with ferry from Miya to Kuwana, in Ise province.

熱田は明治四十年名古屋市と合併して同市の南區をなす。もと東海道の一要驛にして宮と呼び、往時は此地より伊勢の桑名に至る七里の渡または間遠渡と稱し海道第一の大渡津たりしが今は鐵道の便に依り此の渡廢せられたり。廣重の圖は此地に名高き熱田神宮の馬追祭を描けるもの、神宮は實に伊勢太廟に亞げる大社にして今官幣大社に列し、日本武尊、天照大神、素盞嗚尊及び宮簀媛命等を祀り別に土用殿には孚くも三種の神器の一なる草薙寶劍を奉祀す。傳へ曰ふ。日本武尊、東夷征討の御歸途、近江伊吹山なる惡神の誅滅に赴かせ給ふ砌り、寵妃宮簀媛命に托するに草薙劍を以てし給ふ。既にして尊伊勢國能褒野の露と消え給ふや宮簀媛命哀惜措かず乃ち此地に神宮を營みて神劍を安置し以て尊の靈を祀り給ふと。毎年六月二十一日の祭典はその儀容の莊嚴なる海内稀に見るところたり。